

ミャンマーを忘れない

—ミャンマーは、今 私たちにできることは—

千葉 AALA 紙より転載（講演内容をテープ起こしし、演者の点検を受けたもの）

演者 ナンミャケーカインさん

（ミャンマー連邦共和国・シャン州出身、京都精華大学国際文化学部特任准教授）

今日のテーマは、「—ミャンマーを忘れない—ミャンマーは、今 私たちにできることは・・・」ですので、ミャンマーがどうしてこのようになったのか、少し歴史的なことをお話して、主にクーデター後のミャンマーの様子についてお話したいと思います。

刺マンガから見えるミャンマーの社会



このイラストは、スーチーさんが指し示す「DEMOCRA・・・」を軍服姿の人が血塗られた土足で踏みつぶしている様子を表していますが、これはハンレーという作家が書いたもので、私の大好きな作家の一人ですが、残念ながら今年亡くなりました。彼は作品を通してミャンマーの民主化運動を長年訴え続けてきた方です。



自由がない世界作家：殿垣内里奈

現在、私は WART という一コママンガでミャンマーのことを伝える活動をしています。

この作品は、WART が4回ほど公募した作品の一つで、2021年秋ごろのもので、「見ざる、言わざる、聞かざる」の状態は今も続いていることを表現しています。ミャンマーのために書いていただいたということで、営利目的でないものに使用させていただいています。

今、ミャンマーは「噴火寸前の火山」！

ミャンマーの主要年表	
1948年1月4日	イギリスの植民地からの独立
1962年3月2日	第1回クーデター
1962～1974年	ネーウィン率いる軍政
1974～1988年	ネーウィン政権下のビルマ式社会主義体制
1988年9月18日	第2回クーデター
1988～2011年	タンシュエ率いる軍政
2007年8～9月	僧侶を中心とした「サフラン革命」
2011～2016年	民政移管後、ティンセイン政権
2016～2021年	スーチー政権
2021年2月1日	第3回クーデター
2021年～現在	ミンアウンフライン率いる軍政 VS 国民統一政府（NUG）政権

はじめに

今、ミャンマーはどのような状態か、最初に結論をひと言で言いますと、「噴火寸前の火山」のような状態と捉えています。ミャンマー都市部では、事態が鎮静化していて、特に大きな出来事がなければ日本のメディアでも報道しませんが、地方では弾圧が続いていて9割の人々は今何が起きてもおかしくない状態だと考えています。

まず、簡単な戦後の年表を作ってみました。

ミャンマーは、約100年ほどイギリスの植民地でした。そのイギリスから独立したのが、1948年。当時、中国の影響で共産主義を唱える派閥、社会主義を唱える派閥等があり、ミャンマーの地方では少数民族も含め紛争が激化していました。ただ、当時ウーヌー政権では、議会制が敷かれ10数年ほど続いていた。

ネーウィンによるクーデターとビルマ式社会主義体制

ところが、1962年、第1回のクーデターが起こり、ネーウィン率いる軍政が行われました。そして、1974年、憲法を改正し、ネーウィン政権によるビルマ式社会主義体制がしかれました。どういう社会だったかとひと言で言いますと、民間の企業が全く存在しないと考えていいと思います。国内で消費する物はすべて国有企業が生産します。農産物のほとんどは海外に輸出し、それで得たお金で、生産に必要な原材料などを輸入するという経済状態でした。ミャンマーの国内にいる人々は、常に物が無い状態で、戦後の日本の状態に似ています。そのため、国境の闇貿易で入ってきた消費財を都市部の人々は消費する、そういう社会でした。都市部では配給制があって、お米や消費財が地域ごとに配給されました。しかし、品質が悪いので消費できず、これを市場で売って消費できるもの、例えばお米を買うという生活でした。貧困層の人々は、配給されたもの（例えばお米）は安いので、それを消費していました。このように、国民はずっと苦しい生活を続けていました。1986年に3回目のお札が廃止となり、これによって、低貧層はもちろん中間層も上層の人々も

使えないお金がたくさんできてしまって、両替も限られたため、国民の生活が大変苦しくなりました。

丁度、私は1989年に日本に来ましたので、ビルマ式社会主義体制下の生活は中学・高校時代に経験しています。

民主化を求める声の高まりとタンシュエによるクーデター

1988年2月か3月頃、ヤンゴン工科大学、理工系の大学ではトップクラスですが、その学生と地域の有力者の息子との間でけんかになり、最初は警察署が二人を拘束したのですが、翌日有力者の息子は釈放され、学生はずっと拘留されていました。そのため、学生たちは警察署を包囲して抗議しました。すると、警察だけではなく軍も出てきて、抗議する学生に向かって発砲し、一人が亡くなりました。このことをきっかけに、もともとビルマ式社会主義体制に不満を持つ多くの人々がデモに参加し、全国的に民主化を求める声が高まりました。しかし、軍は市民の中にスパイを送り込んだりして運動に混乱を招き、暴動が起きたりして治安が悪化したため、これを治めるためと称して‘88年9月18日にクーデター(第2回)を起こしました。このタンシュエ率いる軍政は、2011年まで続きました。

民政移管によるティンセイン政権の誕生

2011年になると、軍は自ら軍服を脱いで民政移管し、ティンセイン政権が誕生しました。当時、平和的に民政に移行できたということで、ティンセイン政権に対しても軍に対しても世界的に評価が高かったのです。もちろん日本政府もです。日本政府は、民政移行したミャンマーを大歓迎し、企業と一体となってミャンマーを支援すると公表しました。これまでであった5000億円もの借金を振り替え返済したり、解消したりして、2012年から新たにODAが組めるようにしました。

スーチー政権の誕生

スーチー政権はすぐにはできず、民政移管後2015年の2回目の選挙でスーチーさん率いるNLDが圧勝し、政権交代が行われました。ただ、ミャンマーの憲法では、国会議員の25%は軍が占めるということになっています。ですから、国民が選んだ75%の国会議員による民政ということですが、完全ではない民主主義とは言え、スーチーさんが政治の舞台に出てこれたということは、これまでのミャンマーの歴史から見ると民政になったと言っても過言ではないと思います。これによって自由度が増し、かなり変わってきました。

これまでとは違うミンアウンフラインによるクーデター

スーチー政権が2期目に入ろうとするその日、すなわち2020年11月の総選挙でスーチー政権が圧勝後の最初の国会を招集した2021年2月1日、その日の早朝に軍がクーデターを起こしました。

3回目のクーデターは2回目とは違い、全く混乱した状態ではないところで起きたということです。しかし、軍は、混乱した状態を一時的に治めるために「権力を管理する」としました。軍は「クーデター」とは言っていません。2回目よりはるかにねじ曲がった状態で権力を掌握したということが言えます。

2月1日の早朝、スーチーさんと当時の大統領が連れていかれたことを後から聞きましたが、当時報道がなく、国民は何も知りませんでした。インターネットは一斉に遮断されていたので、海外からも連絡がとれない状態でした。ただ、タイやシンガポールのSIMカードを使っているビジネスマンはいますので、これらの人々を通してミャンマーで何が起きているのかがわかってきました。また、ミャンマーには日経新聞の記者がいますので、日本には9時か10時頃クーデターのニュースが入り、日本を介して拡散しました。

ミャンマー時間で7時半頃のことです。

市民的不服従運動 (CDM)で軍に立ち向かう

2021年2月1日、クーデターが起きましたが、最初からみんな外に出てデモをしたわけではありません。最初の1～2日は一体どういう状態になるかをじっと見ている、3日目に医療関係者から市民的不服従運動 (CDM)が始まりました。これは、軍の支配下にいることを拒むという意思表示です。いろんな手段を使ってCDMをしました。

ミャンマーは、ビルマ式社会主義体制が長く続いたので、ほんの一部を除けば病院、大学などはほとんど国立、鉄道は国有鉄道しかありません。ですから、各省庁の公務員も含め、そこで働く人々はほとんど公務員です。その人たちがCDMを始めて、仕事に行かなくなりました。もちろん、大学生、小・中・高生もCDMに参加しました。そうすると、行政がまわらなくなり、軍に衝撃を与えました。ミャンマーのクーデター以降の話をするときには、このCDMという言葉無くしては説明できません。

もちろん平和的な市民の意思表示の仕方はいろいろあって、デモの手段も実にさまざまです。ミャンマーの人々は、知恵をふり絞って被害が最小限になるような方法を考えだしました。花を持つ花デモ、直近で弾圧されたことがあり、これはのちほど説明します。サイレントストライキは、家の外に出ない、お昼のある時間帯に店のシャッターを閉める、そうすることによって街が閑散として抗議の意思を示すというものです。これも、悲しいできごとが起きているので、あとで説明します。

このようなミャンマーの人々の平和的な意思表示に対して、軍は実弾を発砲しました。軍による初めての犠牲は、2月9日、首都ネピドーで起きました。衝撃的な映像ですが、これは日本でもNHKのニュースでも報道されました。どこから飛んできたかわからない銃弾が、ヘルメットをかぶった女性の頭を突き抜け、彼女は病院に収容され治療を受けましたが、10日後の19日に亡くなりました。

その後、あちこちの街で軍による発砲が行われるようになり、たくさんの犠牲者がうまれました。これは、ヤンゴン大学の近くの高校の門前で、双子の兄弟の弟の方がお腹に複数の銃弾を受け亡くなりました。悲しい話ですが、詳しいことを知りたい方は、次のリンクを開いてみて下さい。デモの様子などがわかりますが、激しい映像も含まれていますので、今日、ここでお見せするのは止めておきます。

・ <https://www.facebook.com/watch/?v=517857446845666>

(2:34) Athan より 2022年9月30日投稿

・ <https://www.youtube.com/watch?v=k-KX9TSBM2I>

(6:22) Spring Legends より 2022年8月13日投稿

ミャンマー第2の都市、マンダレーで起きたこの事件は報道されたので多くの方がご存じだと思います。デモに参加していた通称「エンジェル」さん(19才)は、クーデター軍に後頭部を撃たれ亡くなりました。その証拠隠滅のためだと思われますが、軍は家族の許可なく墓を掘り起こし、銃弾を摘出して持ち去りました。



このようにミャンマー国内にいる人たちから facebook 等への投稿で情報が送られてくるので、国外にいる私たちはミャンマーの様子を知ることができます。ミャンマー国内の若者の軍に対する抗議の思いがますます強くなってきていることを感じます。また、国民も軍に税金を払いたくない、電気代も水道代も払えば軍が支配しているので何に使われるかわからない、だからボイコットがずっと行われていました。(左のイラスト:作家ウェヤン)しかし、2022年夏以降になると、軍の弾圧が強まり、電気代を払わない家のメーターボックスを取り外すとか、家に入る電線を切るとか強制的に行われるようになり、仕方なく電気代を払い始めた家が増えていきました。

高校生、大学生たちの抵抗運動



さて、大学の状況を詳しく見ていきたいと思います。ミャンマーには全国に 134 校の大学があり、2.2 万人の教員がいますが、その半数以上が不服従運動 (CDM) に参加しています。そのために大学の機能が働かなくなり、軍は職場に復帰するよう手紙を出したり、電話したりしますが、それでも大学に戻らない者に対しては停職処分を発令します。もっとひどい場合は、スーチーさんを支援している民主派の人々、軍の対抗政府として活動しているオンライン政府、NUG (国民統一政府) と言いますが、それらを支援している人たちに対しては、直接的な弾圧を行っています。例えば、家などの私財を軍が一方的に差し押さえるなど、何百軒もの国民民主連盟 (NLD) の党员、議員の家がそのようになっています。

学生は、全国に約 35 万人いて、その 8 割はボイコットして通学しませんでした。そこで、軍は、2021 年 5 月、ミャンマーの新学期にあたる 6 月を前に強制的に大学を再開しました。丁度この頃、コロナの感染が蔓延していて大変な状況でしたが、大学に来ない学生に対して (ボイコットに参加していない) 大学の教員が大学に来るように電話するなどプレッシャーを掛けました。

当時、コロナに感染しても、治療や入院がままならず、お金があっても入院できないという状況でした。また、自宅で酸素ボンベを使いたくても、買えませんでした。軍が民間

の酸素ボンベ会社に命令して、生産を停止させたり、配給させなかったりしたためです。工場の人たちの中には、困っている人がいるのに生産や配給ができないことに心を痛めているとSNSに投稿している人たちがいました。

このように軍の弾圧がひどくなる中で、CDMへの参加が徐々に少なくなってきました。学生たちは、命の危険があるので学校へ戻ったりしましたが、それでも高校生たちはCDMに参加していることを、次の数字で拾いました。

毎年3月に大学入学試験、日本のセンター試験のようなものがあります。2019年、2020年には80万人、90万人くらい受験していたのですが、今年2023年3月にはわずか18万人でした。約8割の高校生が、大学受験しなかったこととなります。この状況がずっと続くことになると、ミャンマーの未来がどうなるのかとても心配です。

何が起きるかわからない、今のミャンマー

最初の方でお話したサイレント・ストライキが、2021年12月10日に初めて行われました。12月10日は『世界人権デー』の日、この日に行うと決めたのです。ヤンゴンでは東京のような街でたくさんの人々が生活し、働いています。この日、ヤンゴンの街はひっそりと静まり返りました。その様子をミャンマー人のフリージャーナリストが写真を撮りに出かけたのですが、軍につかまり、拘留中に拷問を受け、3日後に亡きながら自宅に送り返されました。軍は、拷問については一切認めません。



私はWARTの活動をしていて、作品の公募をしていました。そこにミャンマーの当時9才の子が、12月10日、家の中にいてこの作品を描き、応募してくれました（「無題」：ヤウンニートン WARTより）。胸の所に「QUIET」、抵抗を示す3本指が描かれています。これを描くこと自体、とても大変なことです。もし、この作品を携帯に保存していて、街で軍の職務質問にあい、携帯を見せるよう言われてこの作品が見つかったら即連行されます。そのあとどうなるかわからないという、恐怖しかない状態です。

今、ミャンマーで無抵抗の人々がどれくらい亡くなっているのか調べてみました。この調査には武器を持ち軍と闘って亡くなった人たちの数は入っていません。6月23日の時点で3692人、昨夜（7月29日）見たら3850人。ほぼ1ヶ月の間に160人近くの方が亡くなっています。今、こうしている間にもミャンマーでは一般の無抵抗の人々が殺されていることを、ぜひみなさんに伝えたいと思いました。（「犠牲者の数」挿入）

この他、政治活動をし、軍に対して抵抗運動をして政治犯としてつかまった4人に死刑判決が出されました。これに対して、ASEANや国連は執行しないようプレッシャーを掛けましたが、2022年7月25日執行されてしまいました。これが国際的に報じられて以

降、死刑実刑判決になっている政治家の情報を軍は出さなくなり、実態がよくわかりません。ただ、例えば、拘留している人を刑務所から別の所へ移送するのに、移送先に着かないということが起きます。家族は面会もできず、弁護士も会うことができず、とても心配ですがなす術がありません。遺体が見つかることもあれば、遺体さえ見つからず行方不明ということもあります。遺体について、家族への軍の説明は、「移送中に事故にあって、車が転倒した時に政治犯が逃げようとしたため撃った」と言うものです。しかし、政治犯は重罪犯のように足をチェーンでつながれているので、逃げられるはずがありません。百歩譲って逃げたとしても、足を撃つなどできるわけで、殺す必要などありません。軍に拘束されて連れていかれたら、もう終わり。何が起きるかわからないというのが、今のミャンマーです。

CDM参加者らの「抵抗」は、今、ソフトパワーに

今、次のようなさまざまな活動を通して、ミャンマーの状況を伝え、支援・寄付を求める活動を活発に行っています。

- ・私が関わっているWARTの活動のように絵で表現したり、それらを2023年カレンダーにして販売したりしています。様々な団体や人々によって次のような活動もあります。
- ・詩を詠み、詩集（ミャンマー語）として出版・販売しています。
- ・CDMや国民防衛隊（PDF）の体験談を本（ミャンマー語）にして出版・販売しています。
- ・東京の方では、より活発に活動しています。タイとの国境地帯の町に避難した避難民たちが手芸品（イヤリング、髪飾り、小物）などを創作し、それらを東京に送って、在日ミャンマー人たちが販売しています。
- ・在外ミャンマー人らによって発信されるニュースや作詞・作曲した歌をYouTubeに配信し、聞いてもらうことで寄付したことになります。

We Are The World Cover By CHINLUNG CHUAK ARTIST-YouTube

民主派ネットテレビで配信：PVTV Myanmar-YouTube

Click 4 Freedom , WE CLICK , Padaythar P2P など。

（*英語字幕付きもありますが、多くはミャンマー語。しかし、映像から読み取れることは多いと思います。編集部）

- ・ゲームを開発し、支援者が遊ぶことで寄付したことになります。
- ・映画を製作し、上映会を開催しています。支援したい人は映画を鑑賞することが寄付につながります、などなど。

コパウ監督：『歩まなかった道』（2022年10月上映）

『夜明け』（2023年2月上映）

匿名監督：『ミャンマー・ダイヤモンド』

（2023年8月ボレボレ東中野終了、11月12日～25日深谷シネマ予定）

Lynn Lynn 監督：『THE WAY』（2023年9月上映）

子どもたちが描くミャンマーの今(G-2:2年生を表す)



独裁者が根っこから終焉を迎えるため団結して反撃しよう (CNK 9歳 G-2)

作品の中の空爆されたのは、(カチン州) ザガイン管区 レッイエッコウン村の学校です。泣いている子は、空爆されたときに亡くなった8歳のマウン・ボンや生徒たちへの涙です。僕が言いたいのは、「世界よ、僕らを早く助けてください！」です。(出展：WART)



独裁者に支配されている国民の人生
(TNO 10歳 G-4)

軍がクーデターを起こして、村や学校を放火し、人々が殺されたり、逮捕されたりとなった国民の人生をイメージしています。

(出展：WART)



私たちの学校は、まだ再開していない
(KBH 11歳 G-4)

軍を気に入っている人たちと彼らの子ども達には勉強するのに問題ないが、私たちのように権力主義者を欲しくない学生にとっては、学校が空爆されたり放火されたりしていることを描いている。(出展：WART)



Difference(Yuki 12歳 G-5)

同じ土地に住んでいても人々の心、感じ方、信条等が異なることを表しています。踊ったりしてお祭りを楽しんでいる人々がいる一方、軍に飛行機から空爆され、家を放火されて、小さな子からお年寄りまで地元を捨てて逃げなければならない人々があります。道路一つ隔てるだけで楽しく暮らしている一握りの人たちと軍の弾圧で困っている国民の気持ちの違いを表しています。

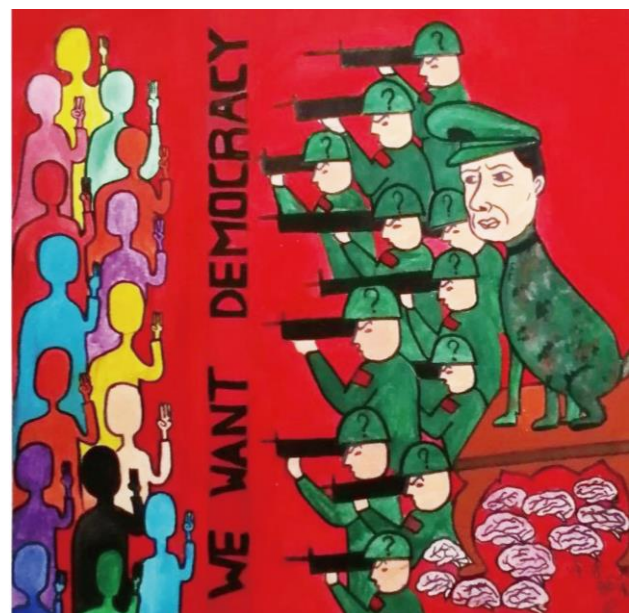
私が伝えたいメッセージは、自分だけが楽しんでいないで、他の人のことをもっと理解する気持ちを持ってほしいということです。

(出展：WART)



Where is the Justice (チップー16歳 G-9)

国連やアセアンのように助けられる機関が、ミャンマーが直面している弾圧を見ているのに、「I strongly condemn this bullying」(このような暴行を強く避難する)と言うだけで、今も動かずに見ているだけです。言葉以外にどんなことを助けてくれるのかと、聞きたくなります。(出典：WART)



We Want Democracy(チップー16歳 G-9)

「我々は民主主義を求めている」権力で押さえつけてもらいたくないと言って、狂犬軍独裁者一同に対して抗議し、声を上げている作品です。

(出展：WART)

これらの作品は、ボイコットをして学校に通っていない子どもたちが描いたものです。



大きな波も船の下、大きな山も
足の下、どれほど力を持とうと
も独裁者の力はPDF（国民防
衛隊）の靴の下

Di Par(出展：WART)

9歳、10歳、11歳、こういう小さい子どもたちが、このような絵を描くという状態になっていることにとっても心を痛めています。無邪気に遊ぶ時期なのに、遊ぶ環境はなく、学校に通いたくても通えず、オンライン学校で学ぶというのは、本当に厳しい選択を迫られているのだと思います。

最近、軍は兵が脱走したりして数が少なくなり、空爆することが主体になってきています。避難民のいる地域にも空爆するので、赤ちゃん、子ども、お年寄り、女性など見境なく人々が殺されています。こうした状況から、軍に対して武器を持って闘う選択をした若者たちは、当初は自分たちの未来のために闘うと言っていましたが、最近では軍に対する憎しみに変わってきているそうです。そういう作品をWARTに届けてくれる若者たちがいます。



・BBCWEB版 2023年2月5日より

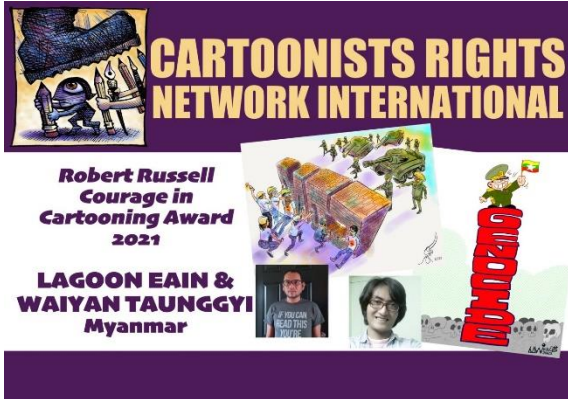
小指に黒のインクがついていますが、これは2020年11月の総選挙の時に二重投票を防止するために使われたもので、一度付けたら1週間くらいは色がとれないというものです。日本政府が笹川陽平さんを団長に任命して選挙監視団を送り、その時に使われたのですが、その年の11月下旬には笹川さんは「選挙は、公正に行われた」と公言しました。

ところが、クーデターが起きると笹川さんはずっと沈黙を続けています。最近では、武器を持って闘っている少数民族と国軍の和平を取り結ぶことをやっているようです。しかし、これまで何度も和平を結んできたのですが、そのたびに軍に裏切られてきたため、国民は全く軍を信用していません。そのような状況の中、笹川さんが和平を取り結ぼうとし

ても、現実味はありません。

軍は「選挙に不正があった」と言いますが、監視団を置き黒インクで二重投票を防ぐなどの対策を行った選挙ですから、その主張には正当性はありません。日本のビルマ研究者で、選挙分析をする大学の研究者である伊野憲治先生がいるのですが、伊野先生も「軍が不正があったと主張しても、これはかなり厳しい」とおっしゃっていました。

風刺画でミャンマーの実情を伝える若者たち



マンガでミャンマーの実情を訴える人たちもいます。これは、アメリカに逃れた漫画家 Kagoon Eain (ラグーン・エイン) さん、Wai Yan Taunggyi (ウェヤン・タウンジー) さんが、ロバート・ラッセル・勇気漫画賞をとったことが報じられています。

その中で、ウェヤン・タウンジーさんは、「ミャンマーの民主主義はクーデターによって完全に破壊され、それ以来、私たちは恐怖と抑圧の影の下にありました。軍事政権は人道に対する罪を犯した。反抗的に私は政治漫画を描いてきました。警察署から電話を受けたとき、私は命からがら逃げなければなりません。私はひどい経験をしました。しかし、どこにいても、ミャンマー軍の不正に抵抗するために漫画を描きます。」と述べています。

(<https://bado-badosblog.blogspot.com> 2021年9月27日より)

国内外のミャンマー避難民をどう支援するのか

- **182万7000人**

2023年5月1日時点での、ミャンマー国内避難民 (internally displaced persons: IDPs) の推定人数

- **149万9000人**

2021年2月1日以降、新たにミャンマー国内で避難を強いられた人の推定人数

- **8万8300人**

2021年2月1日以降、新たにミャンマーから隣国へ逃れた難民の推定人数

- **111万8000人**

2022年12月31日時点での、ミャンマーから隣国へ逃れている難民・庇護希望者の人数 (国連 UNHCR 協会のページより)

ミャンマーの国内外で避難を強いられている人々は、国連の調査で下記のように公表されています。こうした避難民に対して、国連は陸路で支援物資を輸送しようとしています。が、国軍は「戦闘地域で危険だから行ってはいけない」という理由で停止させています。ですから、国連に支援物資や支援金が届いても、国内の避難民に届けるのはとても難しい状況です。

私たちが在日ミャンマー人は、毎週土日になると東京、埼玉、横浜で募金活動をしています。どのように支援しているかという、ミャンマー国内に行くときは、軍にわからないように一旅行者として荷物を車に積み移動します。しかし、最近軍はひどくなってきていて、大量のお米を乗せていると、没収したり、放火したりします。そのため、私たちの関わっている団体はタイとの国境を越えて支援しています。

最新のニュースから

先ほど花デモ（9月号に記載）のことをお話しましたが、6月19日はスーチーさんの誕生日で、いつも花の髪飾りをしている彼女にちなんで花デモをしようということになりました。また、ミャンマーは仏教徒が多いので、仏壇に捧げる花束を市場（いちば）から買って帰る人もいますが、軍はとにかくその日に花を持っている人や花の髪飾りをしている人を逮捕するということが起きました。さらに、この様子をビデオに撮って拡散した人たちがいて、たくさんの人々が閲覧しました。このことに慌てた軍は、誰が撮ったのか調べ、翌日3人逮捕しました。

「2万チャット新札を7月31日発行」と軍が発表

新札発行は、日本では市場に影響を与えないように2年くらい前から告知しますが、ミャンマーでは1週間くらい前に発表されました。また、この新札に像が描かれていますが、この像は国軍のトップが支配している間に生れて、ちょうど1歳の誕生日を迎えたので、それを記念して発行したものだそうです。

しかし、新札発行によって市場が反応し混乱しています。富裕層は、チャットが暴落するというのがわかるので、すぐに車（国外から入ってこず、国内でも生産していないため価値が高くなる）、土地、不動産、金等の買占めが起こり、金を売る店では人が殺到し店を閉めてしまったということです。

ネピドーで大理石の仏像完成、今年8月1日公開

9のつく数字が縁起がいいということで、高さ9メートルの仏像が完成し公開されます。8月1日というのも合わせると9になります。現在の軍のトップは占いを信じる人で、それに従ってやっているのではないとも言われています。国民は、チャットが暴落して食べるのがやっとという状態なのに、軍の行いは信じられません。

ですから、国民は軍に対して「敵」としてしか見ていません。軍から見ると、「敵」に囲まれている状態ということです。

私たちにできることは、ミャンマーを忘れない！ということ

そのために、

1) メディアが報道しないので、ミャンマーの情報を自ら探してください。

例えば、下記のNHK特設サイトがあります。QRコードを読み取ってください。



NHK NHKについて 新型コロナ ナュース 番組表 NHKプラス 受信料の窓口

日本語 ENGLISH MENU

NHK SPECIAL
What's Happening
in Myanmar?
ミャンマーで
何が起きているのか

現地で撮影された映像が
SNS上から次々に削除されている

次へ

「NHK一般サイト プライバシーポリシー (パーソナルデータの取り扱い)」を公表しました。 [こちらからご覧ください。](#) X

2) できる範囲で寄付にご協力ください。

《寄付先》としていろいろありますが、毎週土・日の在日ミャンマー人の募金活動への協力、日本ビルマ救援センターへの募金等があります。

以上